



語り手 大田節蔵さん（明治28年生生まれ）
収録・昭和37年8月（日にち不詳）

あらすじ

昔、六十歳を過ぎると、その年寄り山へ捨てることになつてた。
あるとき大名が、檜の裏元なしに削つたものを出して、「元と裏が分かつた者には褒美をやる」と触れを出した。
ところが、だれもその元と裏が分からない。
それから、ある息子が山へ背負つていったお父さんのところへ行つて、問つてみようと、山へ「そこそ行つて聞いてみたら、そのお父さんは、「そりや、おまえらが知るまあがのう、どっちが裏やら元やら分からんちゆうことになりやあのう、いよいよまん中あ縛つて吊つてみい。同じがように削つたああつても、元が下がるかわ、その方が元ちゆうことを印をして出せ」と言つたので、その息子は帰つてから言われた通りにして出したところ、大名が、「おまえが一人考えて分かつたのか」と聞いたので、息子

は、「いや、こりやあそうじやあなあ、山に捨てた親父に問いに行つて教えてもうたんじや」と答えた。すると大名は、「おお、そうすると親というものはなかなか大切なものや」と感心した。
それから「親というものを大切にしなければならぬ」「親には孝行をしない」ということが始まつたのだよ。

解説

大田節蔵さんのお宅で語つていただいた話の一つである。

ところで、この話は『日本昔話大成』（関敬吾）の分類を見ると、笑話に属し、「和尚と小僧」譚の中の「親棄山」として話型が登録されており、次の説明がある、

五二三 A 親棄山（AT 九八一）

1、殿様が六十（六十一・六十二・七十一）になると老人を山（畑）に捨てさせる。ある男が家の床下に親を隠しておく。

2、強国から三つの難題を課せられる。殿様は解決し

た者に褒美をやることふれる。難題。(a)馬(牛)の親子・青大将の雌雄の判別。

(b)材木の板と梢の鑑別。何曲玉の穴に糸を通すこと。

(a)灰縄千尋。(b)打たぬ太鼓なる太鼓。(c)ひゅうひゅうどんどん袖がぶり、または一把の藁を十六把にすること。

(a)は子馬は親馬のあとにつく。(b)は水に浮かすと根が沈む。(c)は一方の穴に砂糖をぬり蟻に糸をつけて通す。縄を焼く。3、その男が親に聞いて、解決し、親の命を助けてもらう。(それから老人を捨てる慣習がなくなつたといふ)。

語り手の大田さんとご夫人のサダさん(明治30年生)は、そろつてたいそうな物知りで、このころ毎週のようにお宅へお邪魔しては、話や歌をうかがつたものである。

そして当時、独身だった筆者は毎回のようにご夫人のサダさんの作られる夕食をいただいで帰り、うかがつた話や歌などをノートに整理してものだつた。こうして録音も大切に保存して、現在もこうして活用させていただいているのである。

(元島根大学法文学部教授)

